The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『阪大日本語研究』10号（1998）要旨
Author(s)	
Citation	阪大日本語研究. 1998, 10, p. 165-169
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3825
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

相互構文を作る「Ｖシアウ」をめぐって

仁　田　義　雄

キーワード：Ｖシアウ，まともの相互構文，第三者の相互構文，持ち主の相互構文

相互性は、広義ヴォイスに関わる語彙－文法カテゴリの一つである。しかし、広義ヴォイスの中でも、もっとも語彙性の高いものである。相互性を帯びた相互構文を作る諸形式の一つに、「Ｖシアウ」といった形式がある。ここでは、「Ｖシアウ」を取り上げ、「Ｖシアウ」構文が表す意味－統語的タイプとして、〈まともの相互構文〉〈第三者の相互構文〉〈持ち主の相互構文〉の三種を取り出し、その各がどういったものであるのか、また、それぞれの相互関係がどういったものなのか、各タイプの特徴がどのようなものであるのかを、実例を挙げながら、少しばかり詳しく述べた。

アクセントの下げとイントネーションの下げ

土　岐　　哲

キーワード：アクセント，イントネーション，平調，下降調，上昇調，ピッチレンジ

日本語音声の文末イントネーションの記述に、よくアクセントによる下げとイントネーションによる下げを混同していると思われるものがある。そこで、「雨」「飴」「そう」の３種類について、それぞれ「平調」「下降調」「上昇調」で読んだ音声資料を収集し、音響分析して、アクセントとイントネーションによる下げが具体的にはどのように違った現れ方をするかを観察した。その結果、上昇や下降のイントネーションなしに、アクセントだけによるものはピッチの落差が小さく、下降・上昇イントネーションを

伴ったものはピッチレンジが広く、落差を大きくしていることが分かった。

中間言語における可能表現の諸相

渋　谷　勝　己

キーワード：中間言語，バリエーション，可能表現，OPI

ＯＰＩ（Oral Proficiency Interview）の手法によって集められた中間言語データのなかの可能表現を分析し、以下のことを明らかにした。

中国語・韓国語・英語の、どの母語別グループにも見られる特徴として、(1)可能形式は中級以降に生産的に使用されるようになること、(2)可能動詞と助動詞ラレルは規範的に使い分けられることが多いこと、(3)デキルが汎用されることがあること、(4)いくつかの可能形式の習得過程に、デキルによる分析表現が観察されること、(5)能力の高いインフォーマントに可能形式が過剰に使われることがあること、などがあげられる。

また三つの母語別グループ間の違いについては、(6)韓国語母語話者は転移によってスルコトガデキルを多用すること、(7)各グループには独自の習得ルートがあること、などを指摘することができる。

ブラジル人就労者における日本語の動詞習得の実態
－自然習得から学習へ－

エレン・ナカミズ

キーワード：自然習得，正式な学習，動詞の脱落，動詞形式・テンス

本稿は、職場での日本語の自然習得がすでに進みつつあった時点で地域社会のボランティア団体が営んでいる日本語教室で学びはじめたブラジル人就労者を対象とした。同様な言語環境の下で日本語を習得した3名のインフォーマントの自然談話を分析し、動詞の使用状況について考察した。ほとんど学習歴のないBMのデータを、ボランティアの日本語教室で学習しているBIとBAのデータと対照的に分析し、BMには動詞の脱落が多く、名詞並列文の出現頻度が高いことを明らかにした。また、BI、BAの談話を継続的に調べ、はじめの頃には過去の出来事・現象を非過去形で表すことがしばしば見られたのに対し、調査の最後の段階になると過去形が多く用いられるようになったことを明らかにした。なお、職場場面では過去の出来事を話題にすることが少ないため、非過去形が多く現れる傾向が指摘できる。

分析の結果に基づくと、動詞形式の習得が意味や機能の習得に先立つといえるのであろう。

日本語学習者のチュートリアルにおけるあいづちとその周辺
ーフォローアップ・インタビューによる談話分析を中心にー

今　石　幸　子

キーワード：あいづち，リピートの繰り返し，沈黙，意図や解釈の違い，
発話権獲得，フォローアップ・インタビュー

本稿は、母語話者と非母語話者による日本語での談話資料を、先行研究による母語話者同士の談話分析結果と比較し、フォローアップ・インタビューを用いて考察を行なったものである。あいづちの使用について、非母語話者は、母語話者と同じように、いくつかの形式を使い分けていたものの、使用形式に、母語話者との違いが見られた。また、母語話者同士の会話で

あれば、あいづちが打たれるであろう箇所に、非母語話者があいづちを使用しなかった部分に注目し、あいづちの代わりに観察された「リピートの繰り返し」と「沈黙」について、フォローアップ・インタビューの結果を基に考察した。また、表面上は、母語話者と同じようにあいづちが打たれているが、フォローアップ・インタビューで話者の意図を探ると、母語話者と非母語話者間で、どの情報にあいづちが打たれたのかという解釈に、ずれが見られた。この結果は、あいづちを談話分析から考察する際、話者の意図も確認する必要があることを示唆している。

学習者オートノミーの定義を再検討する

青　木　直　子

キーワード：第二言語，オートノミー，セルフ・ダイレクション，定義

第二言語教育における学習者オートノミー研究には、用語の定義にまつわる問題が存在する。本稿は、Henri Holec，Leslie Dickinson，Anita Wenden，Philip Benson，David Littleという学習者オートノミーの代表的研究者５名が、その論文の中で用いているオートノミーという用語の定義を詳細に検討した。その結果、学習者が自分の学習に関する意思決定を自分で行なうという基本的な概念は一致しているものの、これらの研究者の間には、オートノミーを潜在能力とするものと、行動であるとするものがあり、潜在能力の中に含まれると思われる態度やメカ認知が具体的に何を指すかについても異同のあることがわかった。また、オートノミーは学習者の責任か権利か、学習者は何を決めることができるのか、オートノミーを可能にする社会的条件を考慮すべきかについても考え方にかなりの違いがあり、それは各研究者の置かれた社会状況を反映しているらしいこともわかった。

「山田孝雄」について

真　田　信　治

キーワード：日本語学，国語学，国学，山田文法

山田孝雄は、日本語に即した日本独自の近代的な文法理論を構築した国語学者である。また、特に戦前戦中、いわゆる国粋主義を鼓吹した国学者でもある。近代日本の激動の中で生きた山田の生涯を概観し、その研究法を学びつつ、新しい日本語学からの視点を再確認する。